
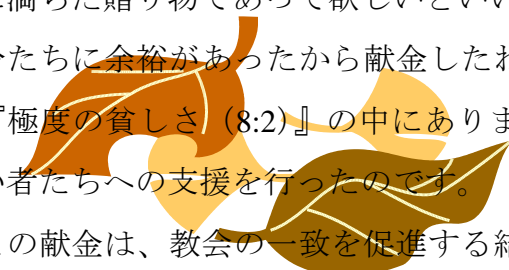


説教要旨 「すばらしい恵み」

コリントの信徒への手紙Ⅱ 9章6～15節



コリントの教会は、ユダヤの貧しい人々を支援する計画を立てていて、パウロがそのコリントの教会の素晴らしい志をマケドニアの諸教会に伝えたところ、マケドニアの諸教会は大いに触発されて、コリントの教会よりも先に献金を集めてしまった。しかし、当のコリントの教会では、献金は殆ど集まっていなかったのです。パウロは、これからマケドニアの人と一緒にコリントを訪問しようと考えていましたが、それはコリントの教会にとっても自分にとっても不名誉な事態になりはしないか、と語っています。そしてパウロは勧めるのです。惜しみなく与えようではないか、と。それは強制されたものではなく、好意に満ちた贈り物であって欲しいといいます。マケドニアのキリスト者たちは、自分たちに余裕があったから献金したわけではありませんでした。むしろ彼らは『極度の貧しさ (8:2)』の中にありましたが、喜びに満ち溢れてユダヤの貧しい者たちへの支援を行ったのです。



この献金は、教会の一致を促進する結果をもたらすもので、コリント教会の募金は、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者を結ぶ新しいきずなを生み出すものとなるのだとパウロは言います。コリントの教会の内部での対立、分裂、派閥争いに対して、和解を訴え、教会の一致を勧めていたパウロは、そこから更に、一教会の枠を越えて、キリスト者の一致、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との和解へと目を向けることをパウロは促しているのです。

このコリントの手紙で、取り上げられている奉仕の働きは、もはや、この聖書の時代に、パレスチナで起こった飢饉だけの問題ではありません。この活動はただ豊かな教会の人々から、困っている教会の人々へ、この時だけたまたま行われるものではありません。なぜなら、助ける人々も、助けられる人々もお互いだけを見ているのではないからです。彼らは皆、これらの活動を通して、創り主である神さまを見上げています。奉仕を受ける者たちはもちろん、奉仕を献げる者たちも、その奉仕を通して神を見るのです。